

## 児童・思春期治療抵抗性うつ病と血清オキシトシン

### Increased Serum Levels of Oxytocin in ‘Treatment Resistant Depression in Adolescents (TRDIA)’ Group

佐々木 剛<sup>1,2</sup>、橋本 謙二<sup>3</sup>、小田 靖典<sup>2</sup>、石間 環<sup>3</sup>、焼田まどか<sup>1</sup>、倉田 勉<sup>1</sup>、久能 勝<sup>4,5</sup>、高橋 純平<sup>5</sup>、鎌田 雄<sup>2</sup>、木村 敦史<sup>2</sup>、新津 富央<sup>2</sup>、小松 英樹<sup>2</sup>、長谷川 直<sup>2</sup>、椎名 明大<sup>3</sup>、橋本 佐<sup>2</sup>、金原 信久<sup>3</sup>、清水 栄司<sup>4,5</sup>、伊豫 雅臣<sup>1,2,3</sup>

1 千葉大学医学部附属病院こどものこころ診療部

2 千葉大学大学院医学研究院精神医学

3 千葉大学社会精神保健教育研究センター

4 千葉大学大学院医学研究院認知行動生理学

5 千葉大学子どものこころの発達教育研究センター

[PLOS ONE 2016 Aug 18;11(8):e0160767]

**【目的】**血中オキシトシン濃度は、注意欠如多動症・自閉性スペクトラム症などの発達障害や愛着の問題に関係すると報告されている。しかし児童思春期気分障害患者において、明確な血液バイオマーカーは明らかにされていない。本研究の目的は児童思春期気分障害患者の血清オキシトシン濃度について健常児童と比較し、また背景の病歴や重症度、治療反応性との関係を中心に病態生理との関連を検証することである。

**【方法】**年齢と性別をマッチさせた児童・思春期の治療抵抗性うつ病患者(n=10)、非治療抵抗性うつ病患者(n=27)、健常児(n=25)を対象に血清オキシトシン濃度を測定した。児童・思春期気分障害患者は、ICD-10 の診断基準をもとに評価され、バールソン児童用抑うつ評価尺度(DSRS-C)、Children’s Depression Rating Scale-Revised (CDRS-R)の評価尺度を用いて重症度を評価した。また、対象者の評価として「血清サンプル取得時点での罹患期間」「大うつ病性障害/双極性障害の家族歴(第 1.2 親等)」「重篤気分調節症の既往」「反復性うつ病性障害の既往」「抗うつ薬によるアクチベーションシンドロームの既往」「血液サンプル取得以降症状評価できた期間」を評価した。

**【結果】**児童・思春期治療抵抗性うつ病患者群は、非治療抵抗性うつ病患者群、健常児群(n=25)と比較し血清オキシトシン値が有意に高値( $p < 0.05$ )であった。

**【結語】**血清オキシトシンは、児童・思春期うつ病の重症度、治療反応性の予測を含む補助診断として使用できる可能性を示唆する。本研究は、うつ病の病態を反映する血中バイオマーカーの開発・実用化研究(平成 24 年度 ~ 平成 26 年度・厚生科研費:201419072A)の補助を一部受けた。

**【倫理的配慮】**本研究は千葉大学倫理委員会で承認され、血液サンプル収集の被検者と保護者より文書、口頭での同意を取得した。